

校一安
補郎藤

女四書

内訓

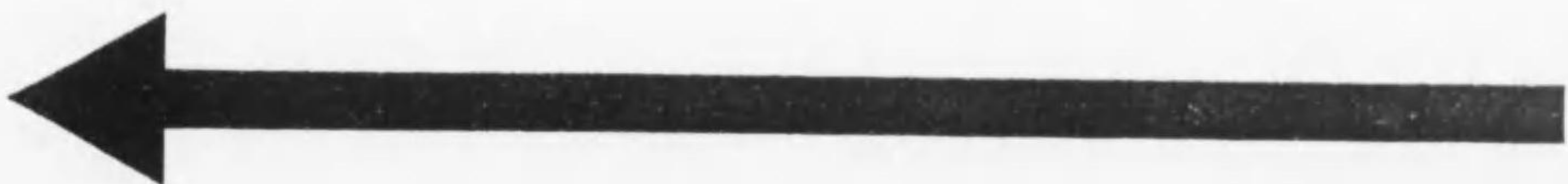
下

館		東京	
函	02	門	東
架	六	部	三
號		類	

4
2601



始



4
260



内訓卷之下

内訓二十章の訓は萬世に至るまで女の則るべき道なり。仰ぎ崇むひとまぢみ朝夕之を讀我が身も受用づきとの也。又古の聖后賢女の正しき行ひを聞侍まば面のいろり見る心地して愚ある身も感發する心出來て道も入る助と有り侍るとのなり。爰も烈女の故事二十條と揚て下巻と有り。聖訓賢範の心を擴め侍るのあり。

漢の馬皇后の事

内訓下 一 漢の馬皇后の事

漢の馬皇后ハ明帝の御后なり。天性才徳優きと
 せ給ひて周易春秋楚辭周官等の學ふ通下給ひ
 其行ひ一として道ふ適もそと云事なり。中み最
 嫉妬との御心まはさばりて皇子の多く生き
 ばせ給へぬ事との悔ませ給ひて才賢と容姿
 美麗き女らきべ我り御方より帝ふ進め奉り給
 ひ若そきと御寵愛らきべ限り無く悦び給ひて
 其女と猶々親しと恵み給ひて皇后の御位ハ貴
 き事上ありと雖聊驕り給ふとゆへに常ふ
 綾錦の鮮うある衣ハ著給へば太き練衣の類荒

かき衣裳との著給へり。御子帝と成給ひて
 後御母方の一門ふ大國と授け政と與らしめ貴
 くなりしものらせんと勅諭有らきども固く辞退
 給ひ仰り奉る昔より外戚の時ふ逢ひぬきべ
 必ぞ分と忘き驕長じて天下の禍と成る事其例
 一少らば其上今我親類夫々の分ふ應じたる
 位ふ備より禄と給よりて居る事時ふ逢たり侍
 ありふ此上何の功もあらざりて大國と賜たり
 天下の政事と執行せんを譬バ二度登る木の其
 根必枯るが如しとて遂ふ我親類と貴くなり



給まばりたりとぞ、けりおどふ辱らも天子の御
 母君とて宮中ふ糸繰り機織り所と建らせ給
 ひて、御慰みら此所へ行て其所作と見え御樂
 と成し給ひて家と成ん

第二曹皇后の事

曹皇后へ宋の仁宗皇帝の御后なり、御資質慈悲
 深く儉約と守り給ひて、貴き御身もて民の効
 勞と思召忘き給まばりて、禁中の御庭ふ田と植
 ませ給ひて、目前耕作の務め易うらぬは、海と見
 給ひ辱らも自ら蠶と養ひ給ひて、徒ふ月日と送

り給ふ事あり。或夜俄に謀叛人有りて御寢殿未
 て乱き入し。帝表へ出んと志たぬふと。后止め
 給ひて出し給ふに。所々の戸鎖を堅く閉給ひて
 帝と護衛居給ひ。多分侍ふ人々も仰るを。今
 の時節の謀叛人必を火と放らぬとの有りて。
 急き水と多く汲ませ。御殿の周囲に置らせよ。今
 夜帝も仕へ奉りて忠勤怠らざるとのハ。后自其
 人の髪を毛と少しづ。剪りて徴とせんと仰せ
 らき。きざ。人々命と惜まぬ。帝と守護し奉りし
 む。案の如く謀叛人火とかけし。きども蓄へ待居

たり。水も難く滅し。事故ふあり。たり。はて
 朝も有りて髪をきらきたる人と志多し。み。召
 出し。皆々褒美と給たり侍り。其後帝夜中不
 俄に重く疾と給ひ崩御志給ひ。后此事と深
 く恐び。人々知らせ給ふに。急ぎ門々の錠をおろ
 させ。鍵どもと取寄せ給ひ。御世嗣の太子と喚入
 き給ひ。叔明る日。崩御の事人々も志
 らせ給へり。斯る俄り。折節變らんと。憲
 りたむ。御智慧比類稀き。御事とも有り。

第三順聖皇后の事

昭睿順聖皇后ハ元の世祖の御后あり勤儉の御徳あり自ら芋代績糸と繰りて布と給ひ綿と舒づく紬と給ふ糸條細く揃ひく鮮りけり事綾綺の綾ふ異りらば常ふ此紬のと著給ひく麗き衣と著給ふは萬の事之ふ擬らづく奢と省き道と慎し給へば萬民御徳ふ化し侍りぬ此時の帝ハ鞬鞞國より起り給ひく唐土と伐亡し其國の帝と成給ひたきハ元より后も鞬鞞國の御生きたり夷狄國ふ生きたりゆも御志ハ聖人の道ふ適をせ給へば何きの國

み生きたりあり人なりとも志たふけらばあど
う聖賢の道ふ適ひ侍らばらんや

第四班婕妤の事

班婕妤ハ漢の成帝の宮女也御寵愛比ひ無りたまきども吾一人寵と專ふせんや成願をせして行ひ正しく容優きところ女たきば我方より帝ふ進め奉り給ひたまふ或時趙飛燕とりよ女の姉妹御寵有るときは此女の嫉妬深く悪逆の事人ふて班婕妤を嫉み咎ふ遭はせんと巧と偽りて帝ふ申上りよハ班婕妤君の妾と御寵愛けりてと嫉み



恐ろしくも君を呪侍ると申上りまきば、帝驚き給
ひ班婕妤と召詮議し給ふ、謹く對へ申上りま
きば、斯の論言とも覺え侍らぬものうゑ、死生命
何りと聖人も教置給ひまきば、悪を作り如何不
とのろひ侍るとも、天命至らまの死ますまこと
のわり、其上正しき事を祈り申上りまはし、天道の遠
きものみま、速ふ適ふ事ハ稀きものわきま、
況して主君を呪ひ申上りま不忠の大悪あまきば、神
明争う邪わす事と歎給まんと申上りまきば、帝
此の返答道理みかあひた事と歎感ま

て、反く百斤の黄金と褒美したるひや、家とを
奪し、

第五懐嬴の事

晋の惠公の太子秦の國に質し居給つり、秦の君
太子の心を我國に止めらせしめんとせん為み、御
娘懐嬴を妻り給ひぬ、或時太子妻の懐嬴の
給ひぬるを、我久しく他國の住とぞ、古郷を懐
ろしく思ひ侍まら、如何もして忍び出で本國
へ遁行んと思ひ侍るや、年比の情忤るは、我
み従ひ共み本國へゆき給ひぬんやと仰るまば、

懐嬴對へ給ひる事、御身の晋の國の太子より
此國に苦しく居給つる古郷を慕ひ給ふは、理也。
妾も伴ひゆきたく思ひ侍まども、妾が親の妾と
太子に仕へたる給ふは、御身を以て此國に心を
留させ參らせし逃し遣る事、きたりぬるは、夫
の命めきばとて俱に逃げ行らば、不孝の罪遁ま
難し、又孝行のためとて逃行給ふ事を親に告侍
らば、夫婦と成り、義理に適らば、是き兩がら道
に適はらば、所詮只御身の望の如く本國へ逃
行給ふべし、我此事を人み洩さば、つらば、夫

君の命ふ忤ふとも不孝の罪黙止し難きまば、我身へ留りて随ひ行べからざると。遂に太子一人と本國へおやり行しめ給つる。孝も立義も缺ざること難有御志あらざや。

第六越姫の事

楚の昭王の夫人ふ蔡姫越姫といふ二人あり。王御狩り出給ふ時此二人の宮女と御車に載行給ひ、御遊の樂の餘り蔡姫といふ女ふ仰せたまひ。今生よく同じく樂むが如く後の世までも斯有まらしく思ひ侍る也。汝は如何思ふやとの給ひ

りまば、蔡姫申々事な、賤しき身の辱き御惠とも與りて、御側近く仕へ奉り侍まば、教あらぬ身も後の世かひて諸共ふところ願ひ侍るやうと申上まきば、王斜にらざ悦び給ふ。はく越姫のいかに思ふやと仰せ有まきば、越姫對へて申上けまは御遊に隨ひ奉りて心の樂しき限りなり。はくわづらの樂も久らまばからざ遊宴と好む國の政事も怠り給ふる君王の道も非ぞ。然るも此樂もみ心を移し給ひて、後の世うけく女も契りたむふと心得がごとく覺え侍まば、御承申がとき事



ありとぞ申上々王理りふ服一給ひく尤も那
 りと仰せぬきども猶蔡姫ぞぞ御寵愛勝りたるべ
 りける其後王重き病ふ染と給ひ己ふ危うく見
 えらせ給ふ時博士と召しトをせ給ひぬきバ博
 士考へ申上々象を此御病極めく御大事あり此
 り乃がら國の大臣ふ祭り易へ侍らば王の御命
 保せ給ふんと奏聞あ々象ふ王の給ひぬきハ國
 の大臣ハ我手足ふ異なりぬ之ふ易へく余が命
 と延べん事詮那とて祭り易させ給ふざりハ
 象ふ折しも越姫進と出と申上々希く願へく

妾の命を祭りかへらせ給をきう。昔御遊の折節妾が命と君諸共と御請申上りし。道も適をせ給をぬ勅諚のきふなり。今國の大臣を惜しむたゆふ御志の御徳昭るなり。斯明るなり。御徳海にまひふ至りては、萬民悉く御命を代らん事と願ひ侍るべし。況數あるぬ妾が身をや、急ぎ御身代りふ立すのらせんと申上りき。王頻りふ留め給つども遂ふ自害しを死しふらる。然き共王の病も遂ふ痊へ給を程なく薨ト給ひ奉るよ。御子數多ありし。何きと世嗣の御位ふ

居奉んと詮議區々なり。多所ふ諸臣の心一同ふ母誠にるもの。其子必仁なりとて。越姫腹の御子と位ふ即りせ。楚乃惠王と申奉り。めぐ度榮え給ひ奉るとなり。

第七 馮昭儀の事

馮昭儀ハ漢の元帝の宮女なり。或時帝の飼置き給つる熊園を破りて走り出御殿へ登らんとて。侍ふ人々遽く騒ぎて悉く逃たり。馮昭儀一人少くも騒ぎ熊に向ひて立居たり。若きば熊も志むし止りて彼方此方見廻し居りて處と。

人々出合と遂に熊を撃殺しぬ、帝馮昭儀も問ひ
給ひ、汝一人女の身とて怖き熊に向ひく
けり、汝一人女の身とて怖き熊に向ひく
立た多事奇特の意ありと仰り、馮昭儀對
て申上り、妾素より聞及び侍りしに、以か
る猛き獸も人どお恐きを一先退くとのけり
と、故も若も帝の御前近く來ん事を思ひ、熊に向
ひて立侍りぬと申されば、限りなく歡感せし
く、そきとて後馮昭儀を尊と重んと給ひ、遂に
中山の太后とよばせ給ひ、おとけん

第八周主父之下婢の事

周の主父が妻、夫旅へ行たり留守の内、隣よかりの夫
と密通し、我夫歸りなば頭たまをきおんと思ひ、密夫
と謂ひ合せ、兎角我が夫を殺さんと思ふ心出來
り、頃が夫歸るといふ頃、毒の酒を作り、待り、
み、おどろく夫歸り、きい、妻謂ひ、汝は遙とほ々
旅の疲を慰め參らせんと思ひ、酒を造り、置侍り
たり、いざしく進め、おらせんとて、召使めいしふ下女と
喚び、其酒持と參せと云付たり、此下女兼かみその
猥いり、ぐい、きとて、知り、此毒の酒は、隠謀かくまうと



能知りたり々々此酒と持て出て、面前まへに主人と殺さん事、我が不義ふぎも妻の悪逆あくぎやくも真まことあらん。又顯あらわして、夫おとこも妻と殺し、めんも痛いたむ。如何いかんのせん、と案あんに煩わづらひ、出兼いでかみ々々、風と思ひ出、と毒の酒と持て出ると、故ゆゑと躓つまずき倒たせ、毒の酒と皆覆ふくして、々々、主人大おほに怒おこり、鞭むち打うつ、み打うつ、と苦くるし、とて、後言ごごんひ、頭あたまを、やせん、序ついでに殺ころさば、やと妻つまと共に、之と打うつ、絶たえ入いるを、み成なり々々、堪かん忍しの強つよく、と遂ついに言い頭あたまを、はぎ、と過行あやまり々々、其後夫の弟あに、此仔細こゝろと

聞き驚いしく夫ふ斯と知せんまきば。夫驚き悔いしく
 遂ふ妻と出し。ゆく下女の酒と覆したりつゝ志
 と感し。本妻とぬれんとひひききともし。それハ禮
 義ふ適をばとて同心せん。此事世ふ隠きかうり
 々まきば。貴き人々此下女と争ひ迎へんと望めり
 人多かり々家とらん。

第九孟母の事

孟子の若き時。或日奥へ入給ふ。妻祖と脱ぎき
 居らきたり。若きば。此舉動孟子の御心ふ適ひ給
 へば。見せけ給ふとひとく。くつて返し。そ

きより後遂ふ妻は房ふ入給ふ。妻らとてふ思
 ちれ孟子の御母ふ此とて断りて親の方へ返
 らんと暇と乞をき。まきば。孟母之と聞給ひ。急
 き孟子と呼び。誠め給ひ。若き。夫禮の大法ふ三
 の教へたり。門ふ入らんとて。時ふ内ふ誰ら居
 給ふと問く。入事ハ。内ふ居人ふ逢ふ心得とて。卒
 爾不敬の舉動あらん。爲あり。堂ふ上んとて。是
 系時ふ。警咳は系とい人。と警く。怠らせし。まき爲
 也。戸と開きて。内へいらんとて。向ひの方
 と視て。吾足元のとて見く。入事ハ。人の過と見出

まきとどき為あり。然るふ今汝自ら此禮法と知ら
せしむ。妻の無禮と見顕り疎む心はふと反て
汝が過勝せりと責給つる。孟子實あると思ひ給
ひて妻と其儘留め置給ひたりと形ん。

第十陶侃母之事

晋の陶侃が母家貧しく常に苧と績と機と
織と朝夕と送りて。我子の陶侃と教へ誠む
事正しくして。常ふ伴ある人も吾ふ優りたる
人ふのととのふをせられり。或時范逵といひ
る貴人陶侃を訪ひ來り一宿せらきけふ折



も大雪降りて客の馬も秣ふべきやうもあがり
申ねる。自敷く臥たぬ薦とゆくり之と判る馬も
飼元より家貧しくくつらふと設まらまき風情も乏
けき。密く我髪と切隣の人も賣く其價も乏
酒肴と調へ馳走とせしめぬ。范達此大略と聞
大小感と申しき。貧家も育ちあがら陶侃
が才智勝きたるを道理なき。此母も非んば争
り此子と生く侍らんやとを譽らき。陶侃
あく陶侃高位高官も登り譽せ残世も顯り
しとらん

第十一 敬姜之事

敬姜の公父文伯が母なり。或時文伯友と連立堂
への不ゆと母の見らき。友達の人文伯と
敬す。文伯が太刀と持履と直し。削ひ屈くと親
兄あどふ敬ひ事。が如く。母之と見く急
ぎ文伯と呼び責らき。昔の聖王明君の國
土の人悉く臣下たき。我も從ふ人の我も
益あり。賢人けき。敬ひ尊む。臣下
の如く待遇し給ふ。毎常さやうの賢人も遇ひ
御身と謙り給ふ。事と願ひ給ふ。今汝年

若く位卑く才高うらまはして其交さる友と見え
 ば反く皆汝も従ふ人々あきく賤し此人と見え
 り。汝彼等が従ひ敬ふと見え悦むしおのひ。我
 身と足さる人と思ひ。日々も德行衰く益無
 づしと怒り誠めらきられ。文伯理も服しそ
 きより後い我も勝りたる人ふのそ伴ひ道と勵
 んき。德行正しくあり譽と世も頭と侍
 とある。

第十二 穆姜之事

漢中の李法より姉穆姜は程文矩が妻とありし二

人の子と有る。又前腹の継子四人あり。程文矩
 死し後四人の継子継母と誇り憎む事日々
 深しと雖継母少も聞入ざし愈継子と愛し
 翼餌と衣類食物も至らず實子も勝りて能
 育るき。或人云はは継母の我子も勝りて
 慈し給ふやも辨つた。斯不孝なる継子なきは
 逐出し給つと諫めらき。継母答へ申はき。家
 の此継子どの素より天性の資質の悪くね
 ども。おの心の辟ゆるゆゑあせ。我義と盡し
 導侍らひ。おの善心も遷らばらむ。おの慈愛

の心倍々深かりありあふ斯りなは処ふ繼子の惣
 領重き病とらけ。己も危らく苦む事限りぬし。
 繼母之成悲し朝夕慇懃み處ひ手自薬と温め
 食物と調へ心と盡し〜らつらひおきまゝ其の
 驗もや程あく本復し侍りある。その時繼子の惣
 領三人の弟と呼び寄せ言ひらゑる。繼母乃慈悲
 恩愛の御志今更思ひ當り難有事限りぬし。我
 等拙なり心よ〜年比不孝とせし罪逃るべき
 道なり〜と。四人相具し〜政所へ行。繼母の恩徳
 我々が不孝の咎と云立罪ふ逢えんと訴へりき



女四書 内訓下 〇十七 新編書屋 梓

バ世ふ珍しき訴へ継母の德行比類稀なる事也
とて継母と呼出し給ひ褒美とて其家の諸役を
免しただひひやく四人の継子も尤と知り訴へ來
りなきバ今より後定て悪行を改むべし然ら
バ罪まじきふりらざとて赦し返し給へば継子
も自ら善人とあり孝行の志深くなり家と成
業

第十三樂羊子之事

河南の樂章子道を通りたる時黄金と一包を拾
ひ嬉しく思ひ持歸りて妻ふ見せ悦びるきバ妻

少しわ之と悦むを申さるる志有る士ハ何
程咽渴きても盗泉の水と飲まば廉潔なる人わ
ひわど飢は居時ハ嗟來食とてひて與は居
食と食をばといふ事あり飯令家貧とて朝
夕も薄り侍るとも道も適をば了貨と求むべか
らん然るふ今大路を拾ひ給へば黄金ハ與ふ
る人も得べき故も得る遺したる人のひり
をわり惜く思ふとて拾ひ悦び給ふるは
中しき御心にわらまはと諫めらるる樂羊子道理
も服してやがて其黄金と持て出復野中の拾ひ



一處に置き去りに歸り侍りて家と成らん。

第十四樂羊子妻之事

樂羊子學文の爲師と覓めんを他國へ行くと
が一年を経ぬ内ふ古郷へ返るぬ妻折しも機
と織りて居たりと家が以れふしを早く返り給
ふと問ひりきば旅の物憂きふ堪へず終古郷の
懐りしきふ不圖返り侍りありと答へたりと
ば妻其儘小刀と執りて織りけたり衣を寸々
裁りて樂羊子ふ曰ひり家此衣を織りよ一縷
の糸を積り一寸と成り一寸と重く一尺と成り

漸次しんじ不怠ふたいらざりて遂つい一丈一匹いちぢういちひきと成りぬべし。僅わずかの一縷いちるより事起ことおこりて絶たえぬ勤とむるより其功成就そのこうじゆうも事斯ことごとの如ごとくぬきば、學問がくもんの道みちも亦また之これも異ことあるべからん。然しかるも御身功ごみんこうも積つく給たまはば、衣えと断捨だんせし、小異こことなりざと諫いさめりきば、樂羊子理らくじやうじあるも感激かんげきし、それより取とり返かへし、七年しちねん中なかで古郷こきやうへ歸かへらば、學文修行がくもんしゆぎやうと勵むめ申まをされば、遂ついも學業がくぎやう成就じゆうじゆし、譽なまき我世われよも顯あらはれ侍まをとある、孟母まつぼの孟子まつしと誠まことり給たまはば、之これも異ことらば、賢女けんによの心こころ何なにきき等ら

一きゆゑあるべし。

第十五晏子御者妻之事

齊せいの晏子あんのしの隠かくきぬき宰相さいしやうなり。或時あるとき外そとへ出でらる。其御者ごしや御馬ごばの轡うまづなと執とり鞭むちと打振うちふり、さき得意とくいの顔かほ貌がたし、御供ごこうもる景状けいじやうと、此御者このごしやの妻つま門かどの隙ひまより覘のぞき視みる。我夫われとの舉動あつどう心こころも適あははれし、其歸かへるを待まちて夫とも云いふ、云いふ、云いふ、云いふ、其方そのかたの身上みみづか斯ごとく賤せんしきと、理ことわりぬきそきと如何いかかと申まをす、さきわが宰相さいしやう殿どのの御出ごいでと側わきりも覘のぞ視み侍まをるも、三尺さんせきもたり給たまはぬ程ほどの小男こせうも、御人ごにん柄好へがらよくも、

まはど、然きども御名天下小隠きなりきわ、吾とそ
 大國の宰相もく時と得たると自尊り給ふ御景
 色聊もほしはら、只御慎み深く謙遜りて物と
 思案し給ふ御態ひなり、然るも其方の生きほま
 ひ長高く健うなり人物もく御馬の口と執り此
 況状と羨望りよと思つはら、ふく意氣揚々と
 したはら、き最と浅き、き心得なり、仮令天命
 めく貧賤ふ生き會ひなり共志と立ち時ふ逢え
 けり、恥づきとも非ぶ、其方の貧く賤きけり
 心よりあし、之と足きりと思ひ給へり申り



内訓下
 〇廿一
 版 岳 書 屋 棟

見元侍まば頼む甲斐なき人なりとて頻り暇
と乞ひらまば夫此理と感ず志と改め過み一方
の舉動と俄に變ちりた多有様成りまば晏子怪
しと御者と呼び問えれり多ふ妻の諫めし事何
りか儘ふ申上りまば晏子申しき事多る妻の諫
めし辞に比ひりまば金言のまば稱美は多ふ餘り
けりけり汝も亦悪人なる非るべし人どふ誰も
過に有るものなり諫めし聞受て速り過と改
むる事奇特なきば二人ともふ凡人非とて夫
婦の事備さふ齊の君へ申上らまば妻の命

婦の号せ下りまば褒美しけり夫ハ大夫の官
ふぬし給ひ待りり多ふとけん

第十六 黔婁妻之事

魯の黔婁死したる時曾子弔ひし行給へり黔婁
元より家貧しけりけり死骸の上ふ覆ひた多
布衾は短くし頭と覆へば手足出ず手足を被
へば頭も覆へれぬ曾子見かね給ひて黔婁が妻に
仰せり多ふ此衾を隅ちがひふぬがめと被せ侍
らば頭も手足も覆われ侍りけんまさせ直さ
きよとのなきひれば妻答へて申けり我

夫ハ一生正一きと死好く。仮りふか歪と斜の事と嫌つり。死して後我き此衾とめりて著せ侍らば夫の志不違ひ侍るとの形り。也がめて餘りたらんより正しくして足らざるを遙小勝り侍るとして遂不著せ直さざりなきば曾子深く感ト給ひて妻の辞も夫の徳も推量り給ひおふとわ受。

第十七京師節女の事

唐の京師の節女陳氏が夫ハ讎きとめてる人也。讎此夫と猜ひなきとる忍び入づき便ありて

久しく本意と遂げ所ふ。或人申しんる讐の妻比りき親小孝行の事人なきば此親ふいとせたらん。妻同心して引入導ねんとひひなきば讐之と聞彼妻の父と執らへ云ひおふ家ハ其方の娘内通としく夫の寢所と知せ導侍らば其身の命と救まづし。ゆも侍らぬとの形きば其方の命と奪つしと逼なきば力なき娘と呼寄せ斯と告ぐまば娘心小思ひんる讐の言小従つば夫と殺す不義の罪適き難く。又夫と免きしめんとなれば父と殺させん事も不孝の科重たれば兎角不



義不孝一も有りて我命生るる詮なり。然らば
 惟吾命と捨んより外ハ何一と思ひきり。父と誓
 と小向ひく偽り同心しとみひきり。翌の夜某
 の所小新小髪と洗ひ東枕小卧し居る人我夫
 あり。我棲戸と放て置き侍るべし。之と討給つと
 約束しそれより夫の家へ歸り夫とハ異所小卧
 けり。自ら髪と洗ひ浴戸と放け其の所小東
 枕小卧てそ侍りたり。案の如く夜半時分小離忍
 入り。夜明く首と斬本望と遂たると思ひ悦び出
 おり。夜明く之と見きハ志たると仇の首ゆり。

内訓下
 〇廿四
 飛鳥書屋林

らる。彼妻の首あり、讎と流石木石も非き。妻の孝義と立て、命と捨し心づくと感し憫とそれより後恨みの心もうち解て、其夫と力討ざり。りとなん。

第十八孟姜之事

秦の范杞梁の妻孟姜の嫁して三日め夫長城と云所へ軍役小行き久しく返らぬ。漸夜寒の比小なりぬせば、冬の衣類等と整へ贈り遣ち。あるに程なり便り有りて、某の頃某の日夫死した。小ひぬと告來き。天小踰びて泣悲とせり。遺

骸とが小尋ね求く自ら葬らんとて、遙々と長城と云所ふたどり行。此所彼所と尋見ると、多の屍山野小充滿て、孰き小我夫の骸骨と知れり。されば、哀しく思ひて自ら指と咬みて血と出し、多の骨小滴たらし。我夫の骨あらばらの血染み著き。拭ふも消ゆきと誓と立寄れば、数多の骨の中、小案の如く注たる血痕幾回拭へど、染みつきて消へざり。骨有々きば、此骨どれと拾ひ集め、頸小拭く古郷へ歸り、小潼關と云所小至りて身疲せ力竭く煩ひ、遂小空しく成ふ。其地



の人々哀きみ思ひ死骸を取おき末の世の女は
 夫と思ふ鏡とせんとして其姿を木像まがたに造り社に
 藏くらせぬおき侍りたる家と成ん

第十九 梁緯が妻之事

劉曜りゅうぎょうの梁緯りやうゐと云人を殺し其妻容顔美麗なり
 ぎに取とのみしを吾妻と成りんとあけぬみ、梁
 緯が妻更不同心せぬとして云けぬ、昔より忠臣
 二君ふ仕へば貞女ていじよ兩夫ふ見えぬと承り侍つかへべ夫
 死したりとて争まがり二度他の夫ふ見え侍らんや
 妾めかけ若此節義せつぎを守らばして御身ごみに從したがひ侍り心

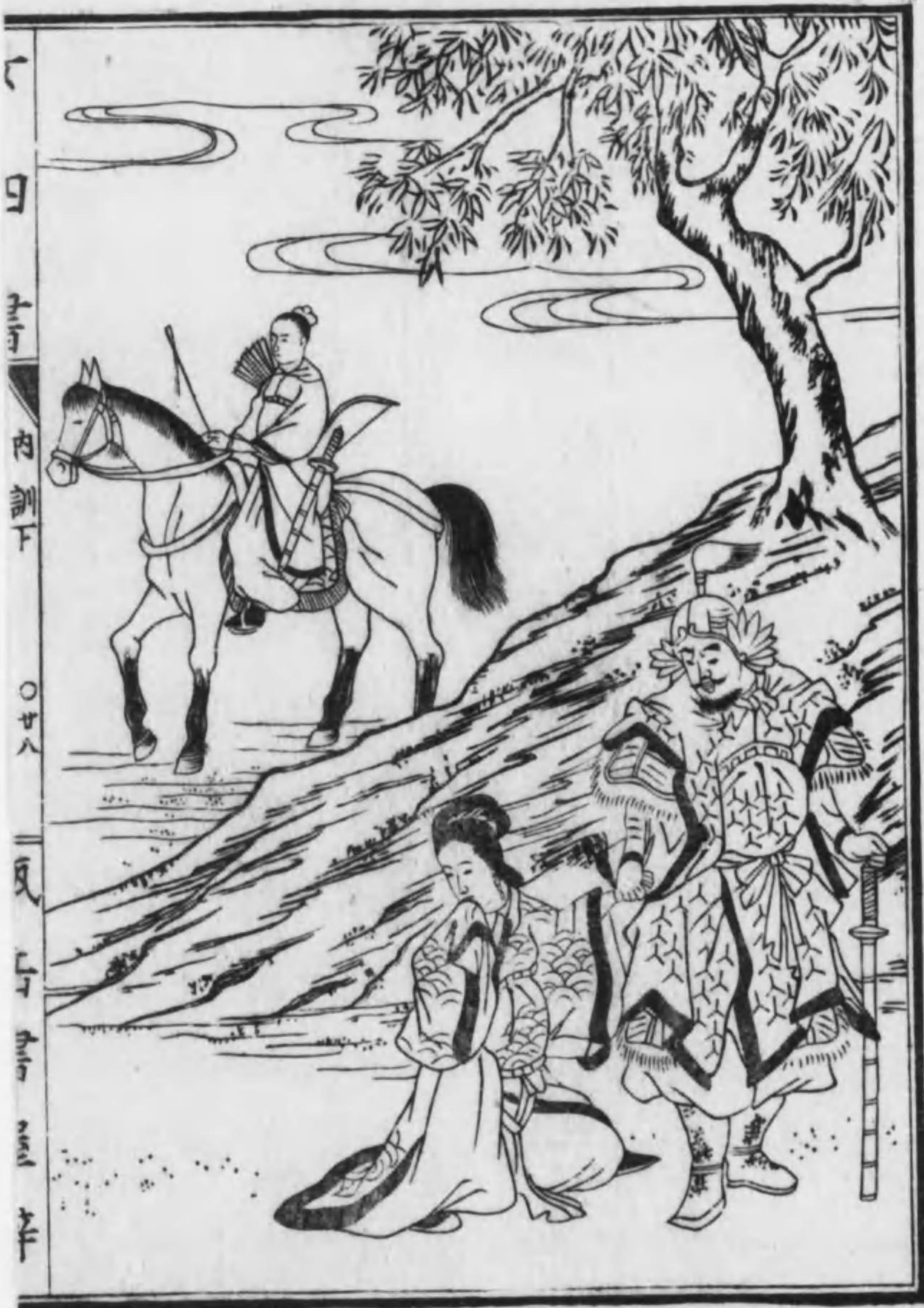
らん又他の夫誘ひ侍るともそれより従ひ侍る
べし斯誰ふも靡き易き不義なる心あらば御身
の妻と相給ひてり詮なき事ならずや願くは
前立し夫と同道ふ所へ給ひ給ひ給ひ給ひと道理
ふ詰て泣口説々きん劉曜も貞女の志と感し宿
し置るるも程なく遂に自害して死し侍りたる
と云ん

第二十王氏が妻之事

王氏の妻の臨川と云所の人の嫁して半年も
立ざり内ふ天下乱き夷狄の國より攻入られ

當時王氏の妻夫に向ひ云くある斯天下騷しけ
きん何時乱妨狼藉し逢ひ侍らんも計り難し我
りしとりとのみせらきつら方へ行き侍るとも
二たび他の夫み見え侍る所御身何方も生活
ゆし中にとりも異婦を迎へ給ひて妾の位牌の前
み向ひことわり給ふべしは侍らぬとの所ら
ば怨を奉んと誓ひられば夫も其志と感し互に
みひあやし置るるも案の如く戎狄其野へ乱入
る夫婦共擒と相きり大將千戸とみあらうの王
氏を妻と見え密に呼寄せ吾妻と相れんと云ひ

ありふ種々断りせ云ひと辞退しきども聞入
 り景色あく頻し迫りきい詮方あくて王氏が
 妻詐り云ひりふとて斯る身と知りたる上
 の辞退申せとも逃き侍る所此上の免も角も
 御計ひふ従ひ侍るべし去りあつら今我夫間近
 く此所ふ有わがら他の夫ふ親しと参らせんこ
 夫婦の中夫の情根も辱りしきい免角我夫と
 ば宥し給ひと何方あても落行せ其後の仰せふ
 従ひ侍らんと云りきい千戸然も有べきこと思
 ひ其夫ある多く此黄金絹あど遺り道まがら乃



内訓下
 〇三八
 女四書

用心ふとて弓矢を與へて宥る一返し侍りぬ。
 是れ一日路もゆき過たらんと思ふ折千戸の約
 束の如く王氏が妻に近づき侍まば、妻先の約束
 に違ひ中々同心の景色見えて云々家の前まふ
 欺き云一の夫の命を援らん謀あり。妾二たび他
 の夫を見えば志い天地神明に誓ひ侍まば、命
 を捨ると露をぬりも惜しからむ。以てやうあも
 心の中へみ計ひ給つと云放ちらまきば、千戸も大
 きふ怒り。遂に王氏が妻を殺し侍りけりと成ん。

内訓卷之下了

終

